

Title	博物館という空間 -記憶の伝承に関する一考察-
Author(s)	関, 嘉寛
Citation	大阪大学大学院人間科学研究科紀要. 2004, 30, p. 176-192
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/11884
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

博物館という空間
記憶の伝承に関する一考察

関 嘉 寛

博物館という空間 記憶の伝承に関する一考察

関 嘉寛⁽¹⁾

はじめに

今日、記憶や歴史をめぐってさまざまな議論がおこなわれている。この要因の一つには、今日世界のいたるところで影響をおよぼしているグローバリゼーションがあげられるだろう。グローバル化に伴い、ナショナリズムが台頭してきている。グローバリズムが西欧的な合理性を貫徹させる空間を創り出す理念である一方で、ナショナリズムは文化的多様性にもとづく個別特殊な社会空間を生み出す作用である。この社会空間を境界づける文化を形成し、維持する上で重要な役割を果たすものとして記憶が用いられる。「われわれはあの出来事を忘れない。それをわれわれの子孫に伝えていかなければならない」と、「われわれ」が過去の出来事を共有することでつくり、再生産されていく。したがって、ナショナリズムという社会空間は共通の記憶を有した集団によって形成されているといってもいいだろう¹⁾。

記憶がナショナリズムという境界づけられた空間を創出する作用をもちうるのは、それがグローバル化のなかで掘り崩されていくアイデンティティを確立するための資源とかわりをもっているからであるといえる。まず考えられる関係性としては、記憶によって伝統がつけられるという側面である。そして、その伝統がアイデンティティの基礎となりうる。ただ、このような伝統が存在せずとも、ギデنزがいうように、過去 - 現在 - 未来を貫く一貫した軌跡が描かれることによってアイデンティティを確立することはできる。自分がどのようにしていまここにおり、これからどうなるのか、ということを自己のなかで描いていくことによって、アイデンティティを獲得することは可能なのである。この過程における過去とは記憶によって構築されたものであることは明らかである。したがって、この側面においても記憶はアイデンティティ確立とかわりをもっている。

しかも、個人や集団はアイデンティティを確立することで「意味」を獲得することができる。自分の経験や構想にたいして意味を見いだすことができるようになる。このように考えるならば、意味は、記憶によって支えられているといえる。そしてさらに、意味を核とすることで、今度は記憶を再構築することもできるのである。

しかし、グローバル化の過程において、社会的および文化的多様性は失われていき、個人や集団がみずから獲得することができる意味から多様性が奪われていく。個人や集

(1) 大阪大学大学院人間科学研究科(ボランティア人間科学講座)

団が「いま、ここ」でえられる意味は、グローバル化のただ中においては、計算可能性と均質性によって塗りかえられていく。結果、いままでえることができた意味から個人や集団は疎外され、それらは個人や集団にとってアイデンティティ確立の資源にはなりえなくなっていく。

このような状況において、「意味」あるいは「意味づけ」をめぐる闘争あるいは防衛反応が発生する。ナショナリズムが主張する自文化中心的、あるいは文化相対主義的な言説は、この文脈で理解することもできるだろう。

しかし、この意味をめぐる闘争は現代におけるグローバル化が現在のように世界を覆いつくすかのような勢いをもってはいなかった1980年代より、「新しい社会運動」においても見いだされた特徴でもある。たとえば、メルッチ(Melucci, A)によると、現代的な集合行為である「新しい社会運動」は物質的な財や資源の生産や分配をめぐる闘争に専念するのではない(Melucci 1989)。新しい社会運動の参加者たちは自分たちの行動の費用や利益を計算するといった経済的目標や政治的市場での財交換によって動機づけられているわけではない。そのような従来の社会運動がもっていた権益獲得志向とは異なり、新しい社会運動は非政治的な領域、すなわち自己実現要求へと移行している。新しい社会運動は根本的にシンボリックな基礎に則って複合システムの管理的論理に挑戦しているといえるのである²⁾。

したがって、意味をめぐる闘争はグローバル化に伴って生じた独自のものとはいえない。この闘争はグローバル化によって強化されたあるいは変容したという方がより適当であろう。現代における記憶については、意味をめぐる闘争の何がどのように強化されたかあるいは変容していったのかということが問題とされなければならないはずである。

このように現代における記憶の様相を考えると、問題となっている記憶には持続的な特徴と時代特殊な特徴があることがわかる。記憶には基底的なメカニズムがあり、それが時代や社会的状況によって、変容したり強化されたりすると考えられるのである。

とはいえ、この二側面を明確に分離することはできないだろう。記憶はあくまでも可塑的で不安定なものであるから、それを捕まえようとした瞬間、形を変えてしまいかねない。このような意味で、記憶を研究対象とする場合、小説や物語、そして記念碑や博物館など、ある程度、物象化されたものをあつかう必要が生じてくる。

本稿では、このような前提に立ち、とりわけ前者の特徴、すなわち、記憶という現象がもっている基底メカニズムを博物館と記憶の関係に注目しながら、考えていくこととする。以下、記憶がもつ空間的位相からこの問題を分析していく。そのために、第1節では、記憶研究における空間論的視座の必要性について説く。第2節では、記憶の空間的特性を現代における二つの空間的編成様式から説明していく。その際、歴史がもつ空間的位相についても言及する。そして、第3節では、記憶や歴史の物象化装置としての博物館を取り上げる。博物館は、記憶や歴史の伝承においてどのような機能を果たしているのかについて分析をおこなう。そこでは、伝承の困難さと可能性について考察を加えていく。

1 . 記憶の時間的位相と空間的位相

本稿において、記憶とは身体はどこかに貯蔵されており、適宜、取り出されるというものではないとする。たとえ脳神経のメカニズムがすべて解明されたとしても、記憶についての問題がすべて解決するということはないだろう。わたしたちが記憶に注目するのは、記憶が「客観的事実」として存在しているからではなく、自己と他者との相互作用のなかで生じたり、ある社会規範との再帰性が了解されるような行為であるからなのである。つまり、記憶は、社会的に構築されるものであるということが本稿の前提となっている。そのような意味で、記憶は固定化された安定的なものではなく、可塑的であり、不安定なものであるといえる。

このような社会的構築物としての記憶は、現在という時点において再構成された「過去の出来事・状態」に関する「想起」と「意味付与」という過程を含む行為であるとしてとらえられるだろう。阿部安成らは「記憶とは過去の出来事の単なる貯蔵としてではなく、現在の状況に合わせて特定の出来事を想起し意味を与える行為として理解されねばならない」という(阿部ほか 1999:p.7)。そして、この想起と意味付与の過程はあらたな想起と意味付与を呼び起こす。したがって、記憶とは一つの完結した行為というよりもむしろ、過程としての特徴を帯びているのである³⁾。

この実体としてではなく過程としての記憶という理解は、まずは記憶の時間的な位相にたいする分析へと導いていく。つまり、現在において「過去」がどのように構築されるのか、そして「過去」に向けられた想起と意味付与という行為がどのような作用を自己や集団にたいしておよぼしているかということについて関心が払われる。過去がいかに語られ、そしていかに理解されるのかが問題となるのである。

たしかに従来、記憶はもっぱら時間的側面からとらえられてきた。それは記憶が過去という時間的次元との関係性を強くもっていることから考えるならば当然のことといえる。しかも、このような分析において記憶は、過去の出来事にたいする解釈過程として把握され、自己やアイデンティティとの関連性を説明する際に用いることができる。たとえば、片桐雅隆は自己を「自己を定義するさまざまなシンボルによって構築されるもの」とし、そのような自己にたいする定義づけは、「相互行為の所産」であり、その構築には歴史性が伴うと述べる(片桐 2003:p.56)。このように記憶の時間的位相に注目した場合、記憶という過程によって自己を過去から現在、あるいは未来へと流れる時間のなかに位置づけることが可能になるのである。

だが、このような記憶の時間的把握にはいくつかの問題が潜んでいる。時間的側面からみるならば、記憶は現在における「過去」の出来事・状態の想起と意味付与によって成立する。そうであるならば、記憶は言語行為によって支えられることになる。言語化されないものは、意味を獲得できず、想起されたものと見なすことはできない。つまり、記憶は語られなければならないのである。このようなとらえ方は明らかに記憶を言語行

為に縮減してしまうことを意味している。記憶を言語行為の領域に押し込めてしまうならば、「身体のうちにはピトウスとして沈殿し、身体的な行為を通して制作される」記憶やそれが「物理的なものの空間的な布置によって物語られる」という側面(浜 1998: p.187)を見落としてしまうことになるだろう。

また、時間的把握は想起する主体の絶対的優位を暗黙の前提としている。想起し、想起されたものにたいして意味付与する主体が絶対的に存在していなければならないのである。しかし、岡真理がいうように、誰でも思いもかけなかったことがらが突然、不意に思い出されるという経験をしたことがあるだろう。そのとき、その想起されたことがらは、当人の主体的な意図とは何ら関係をもたない。ときによっては、忘れたと思っている過去の出来事がおそってくることすらある。このような場合は、記憶は主体を凌駕しているといってもいいのである。つまり、「人がなにごとかを「思い出す」と言うとき、「人が」思い出すのではない、記憶の方が人に到来する」(岡 2000: p.4)ともいえるのではないだろうか。時間論的な想起の視点からは、このような側面を十分に説明することができない。

さらに、記憶の時間的把握は、個々人の記憶が想起されること、あるいは語りによって構築されることは説明できるが、それがいかにして他者へと伝承されるのかということの説明の際に、困難にぶつかる。時間論的把握を前提として伝承という現象を共同の想起としてとらえた場合、何らかの権力装置によって歴史が構築され、それに対応して形づくられる「記憶」が、あるイデオロギー装置を通じ、当該の集団内部で一様に想起されるとして、伝承をあらわすであろう。もちろん、記憶におけるこのようなイデオロギー的作用はみても取れる部分もある。しかし、あらゆる記憶における伝承をイデオロギーから一元的に説明することには、あまり意味がない。たとえイデオロギー装置が強力に作用したとしても、記憶がイデオロギー装置による方向づけどおりに伝承されるとは限らないからである。

したがって、記憶の伝承という次元を考える場合、時間論的把握が陥りがちなイデオロギー理解ではなく、まず記憶構築の中核的行為である想起という相互行為におけるレベルの違いを確認するという必要性があるだろう。つまり、集団でおこなわれる想起の主体は個々人である。個々人がそれぞれ別様の想起をおこなう場合は、非常にミクロ的な相互作用が生じていると考えられる。しかし、個々人がおこなった想起が、あるひとつのカテゴリーに収まってしまった場合、個人の想起と集団のそれとが全く同じ手続きや特徴をもってなされるわけではないだろう。そうならば、個人的想起が、いかにして「集団の想起」への転化していくのかを考える必要がある。

記憶の時間的把握を考えた場合、以上のように三つの問題点が考えられる。ひとつは時間的位相以外の捨象という問題である。二つ目には暗黙の内に想起主体の優位性を前提としているという点。三つ目には、伝承という契機にたいする説明の困難さである。本稿では、このような時間的把握の不十分さを乗り越えるために、記憶の空間的位相を

とらえる必要があると考える。

記憶の空間的位相をとらえるとはどのような意味なのか。それは、個人的な想起や意味付与の「土台」となり、集合的記憶を構築する「場」を創りだすメカニズムを把握することである。それは、言語化されえぬもの、あるいはそれ以前のものを理解可能な形態に境界づけたり、主体と空間の再帰的な関係を認めたりすることを意味している。さらに、ある特定の想起の空間を共有するということで伝承という契機を説明することができるようになるのである。次節では、記憶における空間的位相をさらに詳しくみていくこととする。

2 . 空間と記憶 / 歴史

2 1 現代的空間編成の二つの様式と経験・知覚

わたしたちが「空間」から連想されるイメージはどのようなものだろう。たとえば、リビングやオフィスなどの壁で仕切られた物理的な空間、あるいは人と人とのあいだに成立する社会的空間、または神社や寺院などに成立している宗教的・文化的空間などさまざま連想されるだろう。このように空間は、多種多様な術語として用いられる。したがって、空間そのものを定義することは非常に困難といえる。しかし、そうであるからこそ空間の様相そして空間にたいする認識はわたしたちの「さまざまな行為や関係の秩序を支えるいわば「土台」」(若林 2000 : p.78)となっているのである。つまり、どのように空間をとらえるかは、どのように社会が構成されているかをあらわすものとなる⁴⁾。したがって、どのような空間編成が記憶と関連しているかを考える必要がある。

その場合、社会的空間がもつ二つの異なる編成様式が手がかりとなるだろう。それは、「場所の空間(space of place)」と「フローの空間(space of flow)」という空間編成である。

通常、わたしたちが生活を送る空間は、場所の空間として現れる。わたしたちが、さまざまな人や集団と関係をもち、いろいろな経験をしたり、知覚したりする。そして、その経験や感覚が生じた空間は、それらに形式や意味を与える。つまり、どのように経験、知覚したか、どのような経験や知覚をしたかは、それらが生じた空間と密接に結びついているのである。同じ行為であっても、大阪と東京でおきた場合には、あるいはなじみの場所と見知らぬ場所でおきた場合には異なった経験や知覚として現れているのである。そのような生きられる空間を、「場所の空間」と呼ぶことができるだろう。

一方で、現代における社会的諸関係を基礎づける生産様式として資本主義というシステムがある。このシステムが空間編成に与えるインパクトは「抽象化」として現れる。それは、場所的な空間がもち合わせていた「地理的な境界のみならず空間そのものが堅固さや透明性を失って流動化し、断片化し、問題化されてきた」(吉見 2003 : pp.133-134)状況をあらわしている。つまり、資本主義というシステムの影響力がおよぶあるいはその原理 = 合理性によって編成された空間は抽象化されていく。このような均質空間を「フ

ローの空間」と呼ぶことができるだろう。

では、なぜ場所の空間は経験や知覚と結びつき、フローの空間はそれらとは結びつかないのであろうか。この問題を解く上で、写像の概念が有効であろう。正村俊之は空間を社会的位相と体験的位相⁵)にわけ、それぞれの写像関係の差異を明らかにしている(正村 2000: pp.103-109)。

一見すると、フローの空間(空間の社会的位相)は何らかの科学的あるいは客観的指標(たとえば近代的地図)を参照とした空間認識であるがゆえに、非科学的または(間)主観的である経験とは相容れないと考えられる。しかし、写像の概念を用いるとこれらの位相を「区別する根本的なメルクマールは、物理現象の比較が行われるか否かではなく、比較の参照系となる物理現象が何であるのかという点に求められる」のである。そして、「社会的位相のもとでは、参照系となる物理現象は、観察対象となる物理現象と同様に、観察者にとっては外的な事象である」がゆえに、経験とは切り離されていく。一方、「体験的位相のもとでは、参照系となる物理現象は、観察対象と同列の物理現象ではなく、観察者自身に内蔵している。その参照系こそ、身体にほかならない」のである。

体験的位相が、観察対象とは相容れることない、すなわち別の空間的位置を有する事物とは異なる物理現象である身体を参照系としているために、経験や知覚と結びついていく。そして、「いま、ここで」で経験され、知覚されるものは「意味」ももちはじめるのである。

では、身体という排他的な空間がいかにしてほかのものと共存しうるのか。自分以外の他者や現象が自分にとって意味ある関係性をもっているとして経験されたり知覚されたりするのであろうか。つまり、身体が経験や知覚を支える同じ空間を共有しうるのであろうか。正村によるとそれは二段階の「同所性」が成立することで可能となる。

「体験的な空間が構成される際にも、二重の意味での同所性が成立しなければならない。まず、現実空間内の対象と身体が「ここ」という同一の空間的位置を占めていること、例えば、自己が大地の一角を占めていることが確認されねばならない(「第一次同所性」)。...(中略)...身体によって空間が開示されるためには、次に、身体が「あそこ」へと空間的に移動し、そこで他の対象と場所を共有していることが確認されねばならない。それによって、ある対象は「ここ」にあり、別のある対象は別の「ここ」にあることが認識される。このとき、移動の方向を規定しているのは、身体自身の構造配置である。...(中略)...「あそこ」は「ここ」ではないにもかかわらず、身体的移動をつうじて「ここ」となるとき、「ここ」と「あそこ」の間にはもう一つの同所性(「第二次同所性」)が成立する。...(中略)...こうして二つの空間的位置を共有するかたちで身体と対象が対峙したとき、両者の物質的は位置の差異が、空間的な同一性を浮上させる契機となる」(正村 2000: pp.108-109)。

つまり、まず身体がある空間を占めているということが確認される。そのとき、自己

の身体は「ここ」にある。そして、それ以外の空間を占めている何らかの対象が、身体との関係によって、身体的空間から排除されているにもかかわらず、同じ空間「ここ」を占めるものとして再配置されるのである。まさにジメンルがいうように、「各人は自己にとって直接固有の場所を充足し、そしてこうした場所と隣人とのあいだには「充たされない空間」つまり無がある」(阿閉 1989)なかで、空間は隔離と結合という二重の働きをもつのである。

2.2 記憶と歴史の空間的位相

再び、記憶に議論を戻そう。記憶という現象の中心には、想起と意味付与という相互行為をおくことができる。つまり、記憶とは何らかの出来事や事象を他者あるいは自己との相互作用によって想起し、意味付与するという現象全体をさすのである。そして、記憶の伝承とは、このような経験と知覚の共有としてあらわすことができる⁶⁾。

このように考えた場合、この記憶は優れて場所的な性質を帯びることになる。なぜならば、想起とは、個人の内面で単独に生じるものではなく、直接であれ、間接であれ、有意義な他者や社会規範と経験や知覚を共有することによって生じるからである。

たとえば、直接経験したことがらを記憶として構築することを考えてみよう。わたしたちが日常生活においておこなう大部分の想起には、やはり他者との経験の共有という側面を認めることができる。想起された出来事が意味をもっていると想起する主体に感受された場合、過去においてある特定の場所である出来事を経験した自己あるいは他者を、「いま、ここ」で自己のなかで理解し、それをそのようなものとして、つまり妥当なものとして意味づけし承認している。もちろん、その場合、その想起された記憶の内容の事実としての正しさは問題にはならない。問題となるのは、その想起した主体が、それを記憶として構築したという現象そのものなのである⁷⁾。

このような想起では、記憶を記憶として成立させる資源は、共有された経験や知覚ということになる。では、この経験や知覚はどのようにして、記憶として想起される意義を有するのであろうか。それは、その経験や知覚が場所的空間(空間の体験的位相)と関連をもっているからにほかならない。先に述べたように、経験や知覚は場所の空間によって形式や意味などを付与される。もちろん、時間的側面　たとえば、朝なのか夜なのか、あるいは若いときなのか老いたときなのか、平和なときなのか非常事態のときのかなど　もまた、経験や知覚に形式や意味を与えることあるだろう。しかし、現代においては時間的把握以上に、社会的諸関係の空間的位相への注目が必要とされているのである⁸⁾。それゆえ、経験や知覚の空間的位相を十分了解しておく必要があるだろう。

では、抽象化されたフローの空間はどのようにとらえられるのであろうか。この空間編成は歴史と結びつくのである。とりわけ、正史と呼ばれるような公式の歴史の空間的位相はフローの空間に相当する。

歴史は、経験に基礎づけられた記憶に支えられてはいるが、それとは性格を異にして

いる。記憶は、場所と結びつき、その場その場で意味を付与される。したがって、それはその場その場で理解されるだけで十分である。つまり、記憶と記憶の間には一貫性を必要としない。もちろん、一貫性がないというわけではないが、一貫性そのものを必要条件とはしない。一方、歴史はある一貫性をもったストーリーを必要条件とする。つまり、出来事と出来事の間には説明可能な因果関係が存在していなければならない。歴史は叙述されなければならないのである。したがって、単に、無意味な出来事の羅列は、歴史とはいえない。このような一貫性の存在は、ヒストリーとストーリーの語源が同じであるということからもわかる。つまり、歴史とは、もちろん改編されることもあるが、それは一定の検証可能性、第三者による再解釈の排除、抽象性あるいは代表性によって支えられているといえる。歴史は誰がどこでいつ読んでも同じである（あるいは同じであると認められている）必要がある。そして、解釈の幅が非常に限定されている⁹⁾。さらに、歴史は一般には、いわゆる歴史上の人物によって彩られている。そこには、名もなき人びとの日常の生活は捨象されている。これは、歴史が抽象化された空間に存在していることを意味している。それゆえ、このような性質は、まさに近代の空間編成の一つであるフローの空間に対応していることがわかるだろう。歴史の空間では、抽象化され、出来事はある一定の説明原理のもとにおかれるという意味で均質化され、生きられる経験の剥奪が生じているのである。

以上のように、空間の二つの編成様式に対応して、記憶と歴史は性質を異にしている。しかしながら、両者とも可塑的であり、不安定なものということができる。そのため、それを他者に伝えようとした場合、何らかの物象化の過程をへる必要がある。そこで次節では、博物館にその過程を見いだし、どのような性質を博物館が帯びているかについて考えていく。

3．博物館という空間

3 1 博物館における記憶と歴史 記憶伝承の根源的な困難さ

博物館には、四つの機能があるといわれている。それは、「収集・保存」「調査・研究」「展示」「教育」である。これらの機能は、「モノ」「ヒト」「バ」、すなわち「博物館資料」「博物館学芸員」「博物館施設」という三つの要素によって担われている。本稿では、とりわけ収集と展示という部分に絞って博物館を考えていくこととする¹⁰⁾。

博物館における収集・展示の分析として代表的なものは、博物館をイデオロギー装置として見なす議論であろう。たとえば、金子淳は次のように述べ、博物館のイデオロギー装置の性格を規定している。

「博物館は、ものを集め、そしてそれを見せるという根本的な機能を有している。この〈集める〉あるいは〈見せる〉という行為自体、すぐれて政治的な営みであり、個人のコレクションから国家が保有する文化遺産にいたるまで、その規模や形態に

かわらず、ある一定の意図のもとでの価値コントロールがともなっている以上、いわば不可避免的に組み込まれているものだといっている。

もちろん、そこには一方的に〈見せる〉という行為だけが存在していたのではなく、その意味合いを主体的に読み解いていく「観客」が介在していたのであり、〈見る／見せる〉という相互媒介的な視線のもとで、その関係のありようはさらに重層的なものとなる。このように、近代博物館はその仕組みとして、その政治性をすでに内在化されており、原理的にここから自由になりえない」（金子 2001 : p.10）

本稿では、博物館の空間編成に注目しているので、イデオロギー装置としての博物館にこれ以上言及することはしないが、博物館が政治性をもつゆえんもまた、以下に示すその空間的性質に由来しているということがいえるのではないだろうか。つまり、博物館に収集され展示されるモノは、必ず抽象化され、博物館の空間編成に沿ったかたちで、意味を再付与されるからである。では、このような空間編成とはどのような特徴をもっているのだろうか。

博物館の空間編成を考えると、それは歴史に行き着く。博物館という空間は金子も指摘しているように近代的な関心によって編成されている。だが、博物館が歴史をあらわす空間編成となっている背景はそれだけではない。博物館の展示の原理そのものに由来している。荻野昌弘は他者の生産物を所有したいという欲望を「博物館学的欲望」と呼び、二つの特徴を挙げている（荻野 2002 : pp.6 9）。まず第一に、「博物館学的欲望は、一度手に入れたモノを手放すことを拒否して、それを永久保存しようとする」。この欲望は、モノを摩滅消滅から解放し、「永久保存することで、時間を凍結」させる。そして、保存されたモノは、博物館という空間に配置されるのであるが、その場合、モノに元来付着していた「生活の臭い、そしてモノそのものが放つ臭いが消され、モノを破壊するような秩序の阻害要因は取り除かれる」。第二には、博物館学的欲望は「あくまで『本物』を探し求める」という特徴がある。そして、「あるモノが本物であるためには、まずその『出生』もしくは『起源』が証されなければならない」のである。さらにそのモノが「稀少であり、できれば、他にはない唯一無二のもので、しかも再び、それを生み出すことがきわめて難しいものでなければならない。そして、それ自体がレファレンス（参照の対象）になりうるものでなければならない」。つまり、そこかしこに見つけ出すことができるものであっては博物館に展示されるものとしてはふさわしくないのである。

このような欲望を体現した空間として博物館が存在するならば、そこには抽象化の作業と単一の原理のもとでの意味の再構築がおこなわれていることが了解される。つまり、モノはそれが元来存在していた場所の空間から切り離され、まずは抽象化される。それが用いられる場所とは異なる空間に移され、元来付与されていた機能や意味を取り除かれていく。たとえば、誰かの個人の所有物であった弁当箱は、ひとたび博物館におかれると、もとの弁当箱であることをやめてしまうのである。荻野も指摘しているようにモノは何も手を施さなければ、そのまま消えてなくなる運命にある。ただ、そのような消

滅の過程は、モノが場所の空間と結びつきを有している過程でもある。モノはある特定の空間で、使われ、それが使われなくなり、忘れ去られていく。そのなかで、モノは意味を獲得し、そして失っていく。これはモノのナチュラルヒストリーといってもいいだろう。しかし、博物館に保存され、配置されるモノは、このナチュラルヒストリーから強制的に逸脱させられる。保存されるモノはあたかも意味を有したまま固定化されるようではあるが、そのモノの意味を支えていた場所の空間から切り離されてしまったため、消滅の過程から離脱した瞬間、意味を喪失してしまう。結果として、モノは抽象化されていくのである。

そして、意味が消去されたモノは再び、ある一定の原理にもとづいて意味を再付与される。たとえば、浜日出夫は博物館におけるモノの配列の法則性を「博物館の文法」と呼び、次のように説明している。

「博物館におけるモノの配列もこのモデル(統辞的・範列的からなる文のモデル)にしたがって考えることができる。分類によって範列的なモノのクラスが作られる(それらは収蔵庫のなかに保管されている)。それらのモノのクラスから選び出されたモノを統辞的に連結したのが展示である。そして、歴史展示の場合にモノの統辞的な関係を形作っているのは「クロノロジー」、すなわち時間的な前後関係である」(浜 1998 : p.154)

つまり、博物館ではモノはかつて場所の空間によって付与されていた意味とは異なる意味を付与されることとなる。そして、場所の空間に根ざす経験や知覚に基礎づけられたものではなく、近代的な時間・空間認識のもとで意味づけされるのである。というのも、モノの配列の前提となる時間的前後関係や空間的配置とは、優れて近代的な時間・空間認識であるからだ¹¹⁾。いいかえるならば、モノの配列は非常に近代的な合理性にもとづきなされるといってもよい。

したがって、博物館という空間には原理的には歴史しか存在しないことになる。場所の空間から切り離され、意味を剥奪され、近代的な時間・空間認識にもとづき意味を再付与されたモノが示すのは歴史なのである。歴史がもつ空間編成は、生きられる経験からは切り離されているので、記憶がもつ伝承のポテンシャルを備えていない。伝承とは、想起や意味づけの共同性あるいは集合性が問題であり、これらの性質は、前節で示したとおり想起は場所の空間に基礎づけられるからである。

しかし、多くの博物館ではある記憶の伝承を目的としている。たとえば、国立広島原爆死没者追悼平和祈念館は、国として追悼の意と平和祈念をあらわすことと同時に、「原爆の惨禍を全世界の人々に知らせ、その体験を後代に継承するための施設」とされている(パンフレットより)。ここからもわかるように、多くの博物館では、博物館という歴史空間において、ある出来事についての記憶を伝承しようという困難な課題をみずからに設定しているのである。そこで、多くの博物館では、歴史の空間に記憶の空間を挿入するという作業をおこなう。だが、この作業は明らかに困難なものである。この困難

さを荻野は次のようにあらわしている。

「(アメリカ・ワシントンのヴェトナム戦争戦没者)メモリアルへの供物が、同じくスミソニアン博物館群にあるアメリカ歴史博物館の一角にも展示されている。そのなかには、たばこ(日本のものもある)などさまざまなものがある。一種の祭祀空間に集まる巡礼者たちが残していった供物保存のために、博物館が用いられているのである。これは、博物館の機能としてはきわめて特異であるといわざるをえない。...(中略)...

この奇妙な空間は、博物館の側から見れば、供物という本来モノ自体としては博物館に所蔵する価値が認められないようなものまでその秩序のなかに取り込んだことになる。反対に、戦没者への追憶にこだわり、彼らを供養しようとする側から見れば、博物館学的秩序のなかに異質な空間を築いたことになる。しかし、おそらく、供物の展示はそのどちらでもないであろう。それは、博物館学的秩序と追憶の秩序の緩衝地帯なのである。

この緩衝地帯は、博物館学的秩序と追憶の秩序が根本的に異質なものであり、両者がうまくお互いに融け込んだような秩序を創り出すことが容易ではないことを示している」(荻野 2002:p.19)

このように、博物館という空間において、記憶を伝承するということは根源的に困難なのである。しかし、博物館という空間においてそれが全く不可能であるというわけではないだろう。次に博物館における記憶伝承の可能性について考えていく。

3 2 博物館という空間の境界 博物館における記憶伝承の可能性

以前おこなった調査¹²⁾のなかで、博物館においても記憶を成立させる契機を見出すことはできた。それは、中国の中日戦争関連博物館で展示されていた肉筆で書かれた文書であり、広島では平和記念公園における折り鶴と原爆ドームであった。つまり、それらのモノは、われわれに、ある過去の出来事を想起させ、それにたいする意味づけを可能としている。もちろん、その想起や意味づけが、全くの自由意思においておこなわれたというわけではないのであるが。

中国と広島の両者に共通するのは、場所の空間がまだ維持されているということであろう。では、なぜこれらのモノが場所の空間を保持することができるのであろうか。もちろん、そこには浜が指摘する「博物館のリテラシー」(浜 1998)が大きく影響しているかもしれない。つまり、展示されているモノから場所の空間を構想しうる読解能力を観覧者たちが有しているか否かが問題かもしれない。ただ、空間的位相にさらに注目するならば、文字を書くという行為をおこなった個人の場所の空間が抽象化・均質化を免れているということ、あるいは出来事の発生地にそれらがおかれているために、抽象化されえないということが考えられる。どちらにしても、根源的には困難さを避けることはできないが、博物館が記憶の伝承の装置として機能する可能性を示すものであると

いうことができるだろう。

では、なにゆえにフローの空間としての博物館に、場所の空間が存在しうるのであろうか。たしかに先に、この二つの空間編成は相互に排他的であると述べた。しかし、実際にはそうではない現象が起きている。その理由は、境界あるいは境界づけに関係していると考えられる。というのも、「場所は、境界づけられることによって無限の存在可能を絞り込むと同時に、特定の存在可能性を確保している」(正村 2000: p.96)からである。

原広司によると、境界は三つの位相をもっているとされる(原 1987)。その三つの境界のモチーフは建物の壁・床・屋根に求められる。彼はそれらを「エンクロージャー」「フロア」「ルーフ」と呼ぶ。

まず、わたしたちが一般に境界から想起される作用をもつのは、エンクロージャーである。この境界は、隣接する領域間を断絶させるはたらきをもつ。この断絶によってその領域はある意味を獲得する。さらに、エンクロージャーは、その領域の内部秩序を維持し、外部から不都合な情報の進入を制御する装置としての「閘」を形成することもある。このようなエンクロージャーによって成立する空間の特質は、「容器性」であり、エンクロージャーによって、空間はほかのものとは区別されるという意味で「個体化」される。

したがって、博物館という空間がもつ境界はまさに、このエンクロージャーであるといえることができる。博物館は展示物の容器であり、都市のなかでは、ほかの空間 たとえば、住居やオフィスといった日常生活が繰り広げられている空間 からは切り離されている。

次に、フロアはどのような境界であろうか。空間と社会の関係は単なる器と実体ではなく、社会諸関係は空間によって生産され、その関係は空間を再生産する再帰的なものである。フロアはまさにこの社会諸関係を生み出す空間を形づくる境界といえる。いいかえるならば、それによって境界づけられるのは出来事が生起する空間なのである。また、その出来事によって意味づけられる空間でもある。出来事が領域を形成するために、このフロアという境界にはエンクロージャーがもっていた明確さはない。なぜならば、出来事が領域の形成因としての影響力をどこまでおよぼすかということ客観的にとらえることはできないからである。

このフロアによって境界づけられるのは場所の空間であり、記憶の構築と深く関係しているのは明らかであろう。記憶は、ある時点における出来事についての想起と意味づけによって構築される。それゆえ、記憶の空間は、博物館の空間編成とは異なり、明確な境界を必要としない。しかも、博物館の境界がモノの収集や展示に先だって構築されるのとは対照的に、記憶の空間は出来事によって事後的に成立する。さらに、境界の永続性でいうならば、圧倒的にエンクロージャーの方がフロアよりもまさっている。原理的にはフロアは、出来事の生起から終息までしか存在しえない。このフロアの性質から考えて、さまざまな出来事の由来地が記憶を伝承しなくなっていくことも理解できる。

このように、博物館と記憶の空間的位相を境界から空間編成をみると、この両者は相容れないとしかみることはできない。しかし、境界によって意味づけられる空間はエンクロージャーとフロアだけではない。実のところ、この両者を調停する境界によって編成される空間もあるのだ。それこそが、「ルーフ」なのである。

では、ルーフとはどのような境界概念なのだろうか。ルーフを最も的確にあらわしている建物は、わずかな柱で屋根を支えている「あずまや」とであるとされる。このような建築物は、その下の領域を指定しており、そのような意味においてフロアとつながっていく。しかし、同時に、この建物は明確な境界によって個体化された空間を象徴するはたらきがある。つまり、エンクロージャーと同様に、その領域に明確な意味を付与する作用もある。このように考えるならば、ルーフにはエンクロージャーとフロアの性質が同居している。というよりはむしろ、この二つの境界概念を結合させる性質をもっているといえる。ルーフはある出来事が生起する領域であると同時にその空間を意味ある空間として切り取っている。つまり、エンクロージャーのように閉鎖的で排他的でもなければ、フロアのように不明確で一時的でもない空間が編成されうる。そして、このルーフは集団での同意や価値というものによって規定されるのである。つまり、容器としての博物館だけでは、記憶を伝承することは困難なのだが、出来事を含み込むような「屋根」がつくられたとき、それが可能となるのである。たとえば、広島^{（広島）}の平和記念公園が全体として原爆の記憶を伝承しているのは、このような境界にもとづく空間編成を考える上で参考になるであろう。

むすびにかえて

本稿は、博物館における記憶の伝承について考えてきた。その際、記憶の空間的位相に注目し、場所の空間とフローの空間を峻別する必要を述べた。記憶とは、場所の空間に根ざしており、それが伝承されるとは、この空間が共有されることであることを示してきた。

その一方で、博物館はフローの空間として存在しているために、そこにおいて根源的に記憶を伝承することが難しい。この二つの空間編成は相容れないのである。

しかし、空間編成を特徴づける境界に注目するならば、必ずしもこの二つの空間編成が対立するだけではないことがわかる。閉鎖的でもなく、一時的でもない、空間編成が必要となる。

実際のところ、このような空間編成をもち合わせる博物館はあまり多くはない。それは建築学的な問題なのか、博物館学的な問題なのかという点については本稿の領域を超えているので、明確にはわからない。しかしながら、記憶を伝承することが、空間的に理解された場合、新しい着想が現れてくるのではないだろうか。そのような意味で、グローバル化のただ中である現代において、記憶にたいして注目が集まるいまだ

からこそ、いままでとは異なる新しい空間編成をもった博物館が必要とされているのではないだろうか。

注

- 1) このような意味で、記憶にはある種の公共性を生み出す契機を見いだすことができる。
- 2) もちろん、新しい社会運動のなかには、たとえば、消費者運動や人権運動などのように経済的あるいは政治的な権益をめざしているものもある。しかしながら、1970年代以降、欧米を中心として広がったさまざまな社会運動において、それまでの労働運動に代表されるような社会運動とは異なる性格を認めることはできる。
- 3) それゆえ、ある記憶を想起と意味付与の連鎖から切り出して分析することには困難が伴うのである。
- 4) 空間の分析としては、ルフェーブルのものが有効であろう。ルフェーブルは「(社会的)空間は(社会的)生産である」として、社会分析における空間論的転回を切り開いた。彼において空間は、社会的諸関係の受動的場以上のものであり、その社会関係の結合が具体性を獲得する環境以上であり、この関係が場所を移動する際に必要となる手続きの集合体以上のものとされている。そして、このような空間は、三つの次元に区別される。それは、自然、コスモスなどをあらわす物理的空間(the physical space)、論理的で形式的な抽象概念を含めた精神的空間(the mental space)、社会的空間(the social space)である。物理的空間とは実践感のある活動と‘自然’を知覚することによって定義される空間であり、精神的空間とは哲学者や数学者によって定義される空間を意味している。もちろんこれらの空間は相互に乗り入れ可能であり、明示的に区別することは困難であり、空間を明示的に区分すること自体にあまり意味をもたない。したがって、本稿では空間編成を探る上で分析概念としてルフェーブル的な「社会的空間」を取り上げることとする。
- 5) 空間の社会的位相とは本稿のフローの空間に相当し、体験的位相とは場所の空間のことをあらわしていると考えられる。
- 6) この場合の「共有」とは全く同じものを共有していることを必ずしも意味していない。重要なのは内容が一致しているかどうかではなく、共有していると認識されるその事態そのものなのである。したがって、正確にいうならば伝承とは「経験や知覚に対して共有しているという認識の成立」のことをあらわしている。
- 7) ただし、この出来事とその自己にとってどのような意味をもっていたかによって、想起や意味付与の様態はかなり異なるところがあるであろう。たとえば、本人にとってはトラウマティックな出来事であり、忘却したいと思っている場合、その想起は苦痛を伴い、ある意味、他者との経験や知覚の共有を拒否するかもしれない。
- 8) これについては、吉見(2003)などを参照のこと。
- 9) もちろん、歴史叙述はつねに書きかえに開かれてはいる。たとえば、ル・ゴフは「歴史叙述は過去についての一連の新しい解釈であり、そこには喪失と再生、記憶の欠落と修正がつねにつきまとうている」と述べている(Le Goff: 邦訳 p.174)。
- 10) これ以外の二つの機能(調査・研究/教育)においても、さまざまな研究が存在する。とりわけ、記憶や歴史の伝承という点において、教育が果たす意味は大きいと思われる。しかし、本稿における空間論的分析では教育を完全に視野に入れてはいるわけではないため、示唆するにとどめておく。
- 11) 見田宗介は時間についての近代的な特徴を直線性に求め、近代的な空間認識を次のように説明している。『近代』という世界は、あらゆる質的に異なったものを通約する力をもった尺度を析出する

ことなしに存立することのできない世界であると同時に、未来に向かって不可逆に流れる時間という次元を、往ってまた元の同じ地点に戻ることでできる空間という次元とは、原的に異なるものとして経験する世界として存在している（見田 1996 : p.7）。つまり、近代における空間（時間）は、「無限・均質・不可逆」な性質をもっており、それによってわれわれが経験する世界も性格づけられているのである。

12) この調査は、大阪大学21世紀 COE プログラム「インターフェイスの人文学」の研究費によるものである。詳細は、拙稿(2003)を参照のこと。

参考文献

- 阿部安成・小関 隆・見市雅俊・光永雅明・森村敏己編 1999 『記憶のかたち』 柏書房
- Anderson, B. 1991 *Imagined Communities (Revised Edition)* Verso (白石さや・白石隆訳 1999 『増補 想像の共同体』 NTT 出版)
- 阿閉吉男 1989 『ジゼルメルの世界』 文化書房博文社
- Giddens, A. 1991 *Modernity and Self-Identity*, Stanford University Press.
- 浜日出夫 1998 「歴史はいかにして作られるか」, 『社会学ジャーナル』 23, pp.151-162
- 浜日出夫 2000 「「歴史の社会学」の可能性」, 『情況』 1(7), pp.185-200
- 原 広司 1987 『空間<機能から様相へ>』 岩波書店
- 金子 淳 2002 『博物館の政治学』 青土社
- 片桐正隆 2002 『自己と記憶の社会学』 世界思想社
- Lefebvre, H. 1974 *La Production de l'espace*, Anthrope (齊藤日出治訳 2000 『空間の生産』 青木書店)
- Le Goff, J. 1982 *Storia e Memoria*, Giulio Einaudi (立川孝一訳 1999 『歴史と記憶』 法政大学出版局)
- 正村俊之 2000 『情報空間論』 勁草書房
- Melucci, A. 1989 *Nomads of the Present*, Temple University Press. (山之内靖他訳 1997 『現在に生きる 遊牧民』 岩波書店)
- 見田宗介 1996 「序 時間と空間の社会学」 井上俊ほか編 『岩波講座現代社会学 6 時間と空間の社会学』 岩波書店
- 中村雄二郎・野家啓一 2000 『21世紀へのキーワード 歴史』 岩波書店
- 荻野昌弘 2002 『文化遺産の社会学』 新曜社
- 岡 真理 2002 『記憶 / 物語』 岩波書店
- 関 嘉寛 1999 「現代資本主義社会の空間的位相をめぐって(1)」 『年報人間科学』 (大阪大学人間科学部社会学・人類学・人間学研究室) 20
- 関 嘉寛 2003 「記憶の空間的位相」 大阪大学21世紀 COE プログラム「インターフェイスの人文学」 『臨床と対話』 (報告書)
- Simmel, G. 1923 *Soziologie*, Duncker & Humblot (居安 正訳 1994 『社会学』 白水社)
- Soja, E. 1989 *Postmodern Geographies*, Verso (加藤政洋・西部均・水内俊雄・長尾謙吉・大城直樹訳 2003 『ポストモダン地理学』 青土社)
- 若林幹夫 1997 「都市の全域性をめぐって(上・下)」 『10+1』 No.10/11, INAX 出版
- 吉見俊哉 2002 『カルチュラル・ターン、文化の政治学へ』 人文書院

Space of the Museum : A Study of Patrimony of Memories

Yoshihiro SEKI

In this paper, I analyze patrimony of memories in museums. Under the globalization, memories and their patrimony are paid attention to. The reason is that memories and their patrimony have relationship with making identities of individuals and groups. Therefore, we need to explore not the ideology of memories and their patrimony, but how to formulating them.

The spatiality of memories makes the space where there are experiences and perceptions. This space completely differs from the spatiality of history. We understand a history as a story that has a temporal and spatial consistency. But, a memory is ad hoc.

We take into granted that there are these two elements, memories and histories, in museums. In fact, only histories can be expressed in museums. That is, it is difficult to pass down memories in museums. Because shares of experiences and perceptions are need to pass down memories.

But, it will be possible that memories can be passed down in museums. Of course, the new principles of the spatiality will be needed to make it possible to pass down memories in museums. I think the concept of boundaries will create the principles.